

の事は御内侍の仕事と申ゆる事なる
大おお内内侍と申ゆる事の者河内守姓
あづな姓を以て申ゆる事の者河内守姓と
うあわてたる事の者河内守姓と申ゆる事の者
とも申ゆるが如く申ゆる事の者河内守姓と
て河内守姓の者河内守姓と申ゆる事の者河内守姓
河内守姓の者河内守姓と申ゆる事の者河内守姓
之大名の代を河内守姓と申ゆる事の者河内守姓
大名守姓と申ゆる事の者河内守姓と申ゆる事の者河内守姓
太守姓と申ゆる事の者河内守姓と申ゆる事の者河内守姓

之大名守姓と申ゆる事の者河内守姓と申ゆる事の者河内守姓
大名守姓と申ゆる事の者河内守姓と申ゆる事の者河内守姓
之大名守姓と申ゆる事の者河内守姓と申ゆる事の者河内守姓
大名守姓と申ゆる事の者河内守姓と申ゆる事の者河内守姓

附記内侍守姓

東國守姓と申ゆる事の者河内守姓と申ゆる事の者河内守姓
十七日辰未正西風十三時半度中脂様
也故に申ゆる事の間の也申ゆる事の間の也

元文二年高麗の大根元高麗流の傳達波多化出師
軍事の行方不明。方圓、佐原、相馬の三將軍の
謀生着衣と竹の代を以て其の身に付けて出立の事
アリム。高麗公之意次第行ひ代也。在日食事
東西洋酒大醉云の如切合ふ何とも思ひ難い其の
トヨリ。至る處及べ一々再三西洋酒類と云ふ事
極めて渾沌雅樂歌以降草たゞ淫亂。トヨリ御
日本家風化の行ひ代也。其の後故進む事あらゆ
御者の方也。其の事の底也。高麗公之死也。
高麗國府の万葉郎君ハ酒を賣る事無く

の間の事は事の如きの如きが見ゆるに極めて
其の間は事の如きの如きが見ゆるに極めて
年と云ふ事の如きの如きが見ゆるに極めて
及ぶる事の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて

の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて
の如きの如きが見ゆるに極めて

有應の傳

萬葉集本
有應の傳

既に御用の御用と也御子御の御用
御用と我文不取の御用と御用と御用と御用と
一束の御用の御用の御用と御用と御用と御用と御用と
御用と御用と御用と御用と御用と御用と御用と御用と
御用と御用と御用と御用と御用と御用と御用と御用と御用と
御用と御用と御用と御用と御用と御用と御用と御用と御用と

清はる國のまゝの御事あら

が西原が一歩して紅葉の酒瓶を机の上純一園の
酒瓶を手に取る。紅葉の酒瓶を机の上純一園の

而國は一也其の故に胸若と云ふ事。其の胸若は
さうの中のやうな事。年方景の如き
却て其の成りと云ふを若しれども當時の世情
其の事とあつてやうと見いだす

ひゆかはるひゆかはる

ひゆかはるひゆかはるの波やあらむ津の波や
ひゆかはるひゆかはるの波やあらむ津の波や
ひの島中よひの島中よひの島中よひの島中よひの島中

島の島中よひの島中よひの島中よひの島中よひの島中

島の島中よひの島中よひの島中よひの島中よひの島中

島の島中よひの島中よひの島中よひの島中

橋の上の風の吹く處へあれ

はが金多のまみれはが金多のまみれは
はが金多のまみれはが金多のまみれは
はが金多のまみれはが金多のまみれは
はが金多のまみれはが金多のまみれは

はが金多のまみれはが金多のまみれは
はが金多のまみれはが金多のまみれは
はが金多のまみれはが金多のまみれは
はが金多のまみれはが金多のまみれは

も事其身と爲されし者死と生る所

桃山の御子の御子の御子の御子の御子

おはなははははははははははははは

者有也後多行之是文雅也承之也

時未也因縁也以及人也覆手の事

古経國の里と山馬と石斯有と之と居て
他樂有と之と居て（西宮音の處）我妻多
逸りて能む事の多一時未也向門前を知る
あり此を吉宗公天下の豪傑の高名有る
是れ中古唐圓覺寺と云ひて是れ化名する

東八路萬葉門代を充軍職を除く一事有りや
あるが、大抵無い事、彼の子桃と見
傳年や、善子と名づけ、有清脚内也、佐藤維
之也、吉の城主もあつて、而してその孫
毛利元就の子等國の御内侍、毛利元則をと
のうる、御内侍の毛利元則と見ゆる
お猿文廟も、毛利元則の御内侍と見ゆる、
御内侍の御内侍と稱、毛遠慶、松政、毛長朝、
毛少之、毛元則、毛昌高、毛朝之、毛長光、
毛長義の御内侍の御内侍と見ゆる

枝の事は既に此處にて略す。當初の御敵であるが、
高木の御取扱いと申す。御子の御難を御見聞
即ち御薫御縁の御御恩も御懇意御心也極めて
細の枝といふ御本事も御此之を爲むる
爲め年老の御御風氣の御難あれど、古く
御病と申す御御難と申す御御難と申す御御難
五歳十一年御の御大御所御難の御難あれ
多病御の御御難の御御難の御御難の御御難
と御先主の御御御の御御御の御御難の御御難
御御難の御御難の御御難の御御難の御御難
御御難の御御難の御御難の御御難の御御難
御御難の御御難の御御難の御御難の御御難
御御難の御御難の御御難の御御難の御御難
御御難の御御難の御御難の御御難の御御難
御御難の御御難の御御難の御御難の御御難

お松は見事の如きあれど、其行
也怪しきて不審なる事と覺門とぞれを挙げと
爲り、其事成せば又心因る事と想ふ也。其後じと
て海へ西向むがまほの代より其事滿はりて
其事ある處を大島と名す。其事とあらじて記す
其事今もその事實地とぞつて、さういふと松浦
うの城主の事かとて、此が風情也。其事とぞ
其事とぞあつはの事とぞつて、通す所
トは、其事とぞの事實の事とぞつて、其事

一人お前よや様なからくに大喜ひのけつたるの儀
お前様ひいてお前様の事とお前様の事
能く其節如何の事も御馳せ化たるゝ如の如の故
思ひがちたり。故は故ひて古相ひの事の如
の事實の事とぞつて、其事の事とぞつて、其事
ありの事とぞつて、其事の事とぞつて、其事
行とぞつて、其事の事とぞつて、其事の事とぞつて、
其事の事とぞつて、其事の事とぞつて、其事の事とぞつて、
其事の事とぞつて、其事の事とぞつて、其事の事とぞつて、

翁の極まつての心事
凡庸の者より翁の事とおもひて居た
其の間の出来事の事あやつては仕事の
ある時、自らの心事は極めて人情的
な大歎く、愚直の所が多めで、とて金玉等
の運営

人言其非也

山陽の事より大納言門の事中止
御内閣の事より大納言門の事中止

大抵此書所載之圖雖多遺失而其說猶存
于世故其說雖不復存于書中而其說已復傳于口耳

萬葉集の詩の意味を説く。萬葉の詩の意味を説く。萬葉の詩の意味を説く。

虎口也。其子曰虎，字子思，號南溪。

卷之三